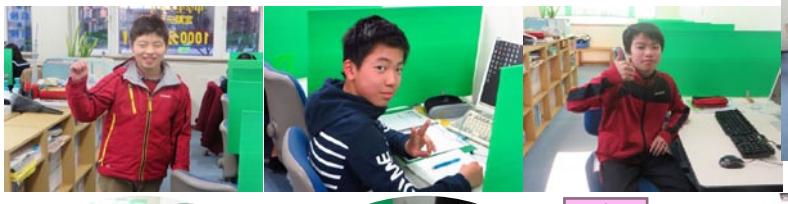
進学通信
ステップゼミナールだより
ホップ・ステップ
February 2
第148号
2019年2月1日発行

武修館中学校に合格した栂野君と附属中学校に合格した村上君、梶田君。おめでとう！



1.10、11日の道コン（上）1、2年生の道コンの日も3年生が

中3生は毎週のように土曜特講。19日の歴史特講が最後でした。

2/1（金）の学力テストに向けて過去の問題に取り組む1,2年生

土曜特講、冬期講座、入試直前ゼミなどに、お母さん方から沢山の差し入れ頂きました。感謝です。

25日の倍率発表、状況説明。

1/26日から入試直前ゼミがスタート。土、日も頑張りましょう！

19期生で放射線技師の住川さん、1月も大量の差し入れです。

21期生で株式会社Kitz 2年目の田村君。日経の高専の記事を読んで盛り過ぎじゃないのと？次の日は居酒屋で盛り上がりました。

「あさイチ」で注目を浴びた〝ディスレクシア〟の16歳天才画家、衝撃の絵本作家デビュ！

「ディスレクシア」という言葉を聞いたことがあるだろうか。失読症、識字障害などという言葉のほうがわかりやすいかもしれない。知能や理解力に問題はないのに、読み書きに困難を抱える一種の学習障害だ。言語ＩＱは133もあるのにかかわらず、文字を書くのが苦手なために学校では評価されず、集団行動になじめなかったという濱口瑛士さんもそのひとり。「あさイチ」や「報道ステーション」などで紹介され、注目を浴びている16歳の少年画家だ。

２０１５年に開催された個展に際し、濱口さんはこんな言葉を寄せている。「私の中の小さな魂の欠片たちを描きました。私の絵を見て、何かしらの感情を皆様と共有できれば幸いです」。３歳の頃から描き続けてきた絵は、彼にとって文字に変わる大切な言葉なのだ。そんな彼が16歳になった今、満を持して刊行するのが絵本『ダビッコラと宇宙へ』（白泉社）である。

先生に怒られた日の夜、〝ぼく〟はペットで金魚のダビッコラとともに冒険に出かける。目をとじると、妄想がはじまる。ほら、雲のきれまからサナダ鳥が、ふわふわ窓の外に飛んできた。サナダ鳥は、鳥じゃない。空飛ぶ象だ

そんな独創的な発想からはじまるこの絵本。飛行船のように空気でできているサナダ鳥に乗って旅する世界は、色鮮やかな〝異形〟に満ちている。何もかもが不思議で、へんてこで、だからこそ怖くもあるけど、おもしろい。にぎやかな市場で売られた隕石パン、隕石パンにそっくりなファル星人の迷子、仲間を増やすためにキノコに変えてしまうキノコ星人、古代の神殿におそろしい王様…。迷子のファルっ子のお母さんを探しながら、ぼくは奇想天外な世界を旅していく。

何もかもがうまくいかなくて、世界に自分だけがひとりぼっちのような気がしてしまう夜は誰にだってあるだろう。そんな読者のさみしさに、濱口さんのイラストと文章はそっと寄り添ってくれる。緻密に描き込まれる一方でその筆致はとてもやわらかく、物語全体が愛情にあふれているのだ。

そう――文章も、なのである。冒頭にも書いたとおり、濱口さんはディスレクシア。本来なら文字を書くのが通常以上に困難だ。けれど本作の文章は、すべて濱口さんの手によるもの。決して「障害なのにすごい」と言いたいわけではない。大事なのは濱口さんが〝乗り越える強さ〟を真に備えた人だということだ。

前述の個展の際に濱口さんは「（集団生活になじめず、孤立していた）辛さを紛らわすためにも、頭の中、胸の中にあるものを吐きだす必要があったのかもしれません」とも語っていた。ひとりのさみしさ、みんなと同じことが同じようにできない苦しみと同時に、内側の世界をひとり豊かに育んでいく楽しさを知っていた濱口さんだからこそ、これほど優しい物語を紡ぎだせたのではないかと思う。

なんだか気分が冴えないとき、何かうまくいかない気がして絶望しかけてしまったとき、そんなときはこの絵本を開いてみてほしい。〝ぼく〟とダビッコラと宇宙を旅しているうちに、心の隙間がいつのまにか、そっと埋まっているはずだから。

（文＝立花もも）ダ・ヴィンチニュース

進学舎セミナーに参加して

1月22日札幌での進学舎のセミナーでは、20年度の小学校から始まる新学習指導要領について、塾で使用しているテキストの出版社、エデュケーショナル・ネットワークの編集長が解説しました。

小・中・高と順次行われる新指導要領、中でも**今年、中1になる生徒は超大変な学年になる（別紙小冊子を参考）**と話していました。

小学校での英語やプログラミングに始まり、新しい大学入試等々、第4次産業革命と言われる時代、日本の教育も大きく変わろうとしています。

編集長が問題視していたのは、過保護、過干渉。子供たちが自ら考え、学ぶ事が出来るようにすること。そのためには極力教えないことと言う。塾と全く同じ考え方でした。社会や企業が求めているのは学力だけが高い人ではないことも重要な事だと！

中1、2年生に英単語、熟語、漢字を覚えるための教材三冊をあげました。ぜひ活用して下さい。

道コンの結果をもとに1、2年生と面談。今後の目標と課題、取組み方について話しました。

高校入試　一般選抜日程

出願変更状況の発表	2／13（水）
最終倍率の発表	2／27（水）　11：00
学力検査	3／5（火）
合格発表	3／18（月）10：00
学力検査の得点開示	3／19（火）～4／1（月）
２次募集出願受付	3／22（金）～3／25（月）
第２次募集合格発表	3／28（水）

高校入試まではまだ30日以上あります。入試直前ゼミもあと6回あります。1回が4時間です。1回の授業で4点づつ、6回で24点UPを目標に頑張りましょう。

まだまだ勉強する時間は沢山あります。これから本格的にインフルエンザや風邪の時期です。体調管理に注意し、志望校合格へ向かってもう少し頑張りましょう！

■２月の予定■

1	金	●中学生 全学年学力テスト	
2	土	◆入試直前ゼミ③	
3	日	◆入試直前ゼミ④	
4	月		
5	火		
6	水		
7	木	●高専定期～14	
8	金		
9	土	◆入試直前ゼミ⑤	
10	日	◆入試直前ゼミ⑥	
11	月	休塾　建国記念の日	
12	火		
13	水	★出願変更状況の発表	
14	木	●私学入試●湖陵定期～19	
15	金	●附属定期	公立高校入試まであと33日
16	土		
17	日	●高専入試●	
18	月	●江南定期～22	
19	火	●明輝定期～21	高専入試まであと17日
20	水		
21	木	●美原定期～22	
22	金	●附属定期（芸体）	
23	土	◆入試直前ゼミ⑦	
24	日	◆入試直前ゼミ⑧	
25	月		
26	火		
27	水	●共栄・鳥取西定期　★最終倍率の発表	
28	木	●共栄・鳥取西・富原・鶴居定期	

在籍する生徒の所属校
小学校　愛国・鳥取西・美原・富原
中学校　美原・共栄・景雲・鳥取・鳥取西・附属・富原・別保・鶴居
高　校　湖陵・江南・明輝・高専・武修館

発行：ステップゼミナール　088-0617　釧路町北都２－２－１　（TEL）0154-36-4170　HP：http://www.stepsemi.com　Mail：spirits@stepsemi.com

余塵『一粒の麦』

「縄文の湖であり日本三景の一つに数えなければいけない」と摩周湖を見て感激していたのは、2013年夏に弟子屈町と釧路市で講演した哲学者の梅原猛さん。その梅原さんが12日、京都市内の自宅で亡くなった。93歳▼当時の講演録や特別寄稿を再読した。自然と共生するのは、狩猟・漁労採集を営む縄文文化で、日本人の中にも残っているが「一番はっきり継承しているのはアイヌ民族」だと言う▼その例として寿司を取り上げた。ネタの魚は上にあり下は米。

これを梅原さんは「上が縄文文化、下が弥生文化で日本文化のシンボル」とまで言い、日本文化の意味を改めて見直すためには「アイヌ文化を理解すること」を訴えた▼講演時、梅原さんは90歳近く。

「〝あの世〟が近いけれど、アイヌ民族の神の力であと10年生きたいなあ。アイヌ民族の知恵が世界の知恵にならないと人類は危ない」と警鐘を鳴らした▼梅原さんのバイブルに「一粒の麦もし地に落ちて死なずは、ただ一つにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし」とある。縄文文化が各地で見直され、縄文文化の現代版ともいえるアイヌ文化が北海道の象徴となりつつある。梅原さんのまいた種が、確実に実を結びつつある。合掌。（星　匠）

釧路新聞 1.17

『番茶の味』

高橋将文　ANAクラウンプラザホテル釧路総支配人

釧路には国立公園が二つ

釧路の大自然は、子どもの頃からいつも目にしている光景で何が珍しいのか不思議でした。

鹿や牛馬が道路から見える風景も日常でした。ところが、本州方面からの旅行者に湿原や阿寒湖などを案内すると、声を上げて「素晴らしい景色ですね」と感激してくれます。

移動の途中、道路から見える鹿、キッネ、タンチョウを見つけ写真を撮る姿を見ると、初めて大自然の醍醐味に遭遇した喜びが伝わってきます。

釧路市には釧路湿原と阿寒摩周の国立公園があります。二つも国立公園がある市は国内唯一で、とても誇らしいことです。　釧路新聞 1.17

釧路って何も無い？

幼少の頃「周りの大人たちは「釧路は何も無い街だからな…」と言われていた記憶があります。「霧は腺いし、湿原しかないし、夏は寒いし」とネガティブな話ばかり㌢ところが昨今は逆転の発想で「霧は祭りに活用。いくらお金を掛けてもつくり出せない湿原の雄大さ」「高温多湿な都会人からうらやましがられる冷涼な気候」「日本這いもいと自慢できる新鮮な食べ物」とポジティブなアピールが功を奏し、長期滞在者が右肩上がりで増えています。世界三大夕日も知られ、且没時間の幣舞橋はカメラを手にする旅行者でいっぱいです。釧路という異国」、頑張れ釧路。　釧路新聞 1.18

学校が自信を奪う？　人の自信を失わせる仕組み

人が生まれながらに持つ好奇心

人は生まれながらに好奇心に満ちている。子供は知らないものが目の前にあれば何にでも興味を示し「あれはなんだろう？」「あれに触れたらどうなるのだろう？」と想像力を働かせずにはいられない。

どれだけ親の制止を受けても、未知のものに対して近づこうとする。見たことがない玩具があれば考えるよりも先に手を伸ばし、ゆらゆらと揺れる熱い炎にさえ手を伸ばそうとする。

しかしその好奇心も、人が赤ん坊から子供になり、大人になっていくにつれて薄れていく。興味を惹かれるものが目の前にあっても「あれは自分には手に入らない」「どうせつまらないものだ」と自ら遠ざけるようになる。対象を手に入れるためではなく、遠ざける理由を作ることにエネルギーを注ぐ。それを超えると、知らないものは興味の対象から恐怖の対象へと変わっていく。未知の可能性は「それなりの現在」を脅かすものだとまで錯覚し、攻撃することもある。

「知らないもの」が「不可能なもの」に変化してしまうこともある。そういった人は、最終的に自分が想像できる範囲のものだけを見て安心するようになる。変わらないものなど存在しないのに、何もしなければ今の平穏がずっと続くと思いたがる。

何かに挑戦することが、いつからか出来なくなってしまう。それが自分にとって「本当にやりたいこと」だったとしても、それを見極める目はもはや残っていない。

社会との関わりが自信を奪っていく

私たちは、社会との関わりの中で自信を失っていく。学校や会社などで集団的な規律を学ぶと同時に個人的な自信を失うのだ。先生や上司という立場が偉いとされている人に従順になる代わりに、自ら選択することが出来なくなり、元々持っている好奇心や自信、クリエイティブで自由な思考などあらゆるものが日々失われていく。

学校や会社では、所属する人たちが固定的な評価の中で順位づけられている。もしその評価基準が苦手な分野で占められていれば、「出来ない人」扱いされてしまう。たとえその人が、評価基準に含まれていないその他の部分に素晴らしい才能を持っていたとしても、その力が日の目を見ることはないだろう。

「出来る人」とされるのは大抵の場合、「明るくて言われた通りに動いてくれる記憶力の良い人」だ。そうでない人の評価は著しく低く、外から見れば優秀で能力のある人でも、ローカルな評価基準の中では光らない。多くの人はそれが理解できているから、評価基準の中で良い人になろうと努力する。

画家の濵口瑛士さんをご存知だろうか？彼は１２歳にして画集を出版する素晴らしい才能を持っており、とても可愛らしい絵から、スケールの大きい緻密な絵まで描く。その中性的なビジュアルもあり今でこそ受け入れられ活躍している彼だが、学校という規律の中で弾かれてしまった一人でもある。

絵の才能は言うまでもないが、歴史に対する知識や興味も人並み以上に持っていた。私が小学生の頃には難しくて到底読めなかった本も彼は読んでいただろう。私が知らなかった世界の歴史も知っていただろう。しかし、ある欠点によって彼に対する社会科の評価は低かった。

彼は漢字を書くことが困難だったのだ。

学校で評価されない才能

客観的に考えれば、社会的興味もあり知識もあれば社会の評価は高いと思える。しかし、漢字が書けなければテストでは0点だ。100の知識を持っていても、50の知識しかない漢字を書けるだけの私に劣っていると誤った評価がされてしまう。本来は彼の方が社会の知識に秀でていたとしてもだ。

算数も、今は解き方まで完全に一致していないといけないというのが教育の基本になってしまっている。彼は計算することはむしろ得意だったと語っているが、解き方を強制されてからは問題を解くことが出来なくなってしまったようだ。

周囲の人との確執もあり、彼は不登校という選択をすることになった。濵口瑛士さんは次のように語っている。

「幼稚園の時、割り算まで出来ていたから、算数だけは大丈夫だと思っていたのに、小学校で最初に算数ブロックを使うようになって、一気に混乱しました。算数ブロックがなければ、今頃は偉大な数学者になっていたかもしれません(笑)。あと、字を書くことが苦手です。普通の人の文字と比べたら、理解不能な暗号のような文字で、はっきりと目に見えてわかります。そのため小学校では見下されてきました。」

『黒板に描けなかった夢～１２歳、学校からはみ出した少年画家の内なる世界』(ブックマン社)

彼には才能があったが、決められた型の中ではそれを生かすことが出来ず、評価されることもなかった。大人しく、他人に危害を加えるような性格ではないにも関わらず、周りの子供たちからも虐げられていた。彼の話を聞くと、才能というものは型にはまったものではないことを教えられる。

どれだけ素晴らしい才能に溢れていても、それを認める度量のある場所でなければ評価されないことがあるのだ。人の持つ可能性は、特定のやり方の中で見出されるものではない。

実際に、学校は彼の才能を見出すことは出来なかった。この仕組みの中で、どれほど多くの人が自信や可能性を奪われていったのだろうと想像せずにはいられない。

才能

多くの才能を持つ人が学校という社会の中で生きていくことが出来なかった。有名なハリウッド俳優であるトム・クルーズも、発明王であるエジソンも同じディスレクシアで、彼らも学校からは排除された。ちなみにディスレクシアは識字障害とも言われ、読み書きに困難を抱えていることを意味する。

トム・クルーズは文字を読むことが困難でも、他の人に台本を読んでもらうことによってセリフを完璧に記憶して、素晴らしい演技によって世界中の人を魅了している。エジソンは教師が嘆くほどの好奇心ゆえに小学校さえ中退したが、後に発明王と呼ばれるほどの偉人となった。

しかしそんな素晴らしい才能に溢れた彼らも、教科書を読めないというだけで学校教育の中での評価は低いものになってしまう。恐ろしいことに、発明王も学校では「落ち着きがない頭の悪い子」だと評価される。このような固定的な基準では多くの才能を潰しかねない。

彼らはそんな常識的な評価には屈せずにその才能を開花させ、常識人には到底到達できない域にまで達したが、仮に才能を持っていたとしてもそこまで達せる人は多くないだろう。　「新しい時代に生きる人へ」より

町田市の都立高校で50代教師が男子生徒へ暴行しSNSで拡散されて波紋を呼んだ問題。その前段には生徒たちが「ツイッターで炎上させようぜ」と話していたといわれている。また、生徒が教師に対し「その小さい脳みそでよく考えろ！」「病気って言ってんだろてめえはよ！」と暴言を吐いていたことも判明した。皆さんはどう思います？ほとんどの人は生徒の方に問題があると思っているのでは？原因があるから結果があります。メディアにも問題ありです。